

乳児期における「おどり」行動の発達の変遷

慶應義塾大学 文学部
山本絵里子・秦政寛・皆川泰代

1. はじめに

「おどる」という行動はヒトのコミュニケーション行動の1つとして考えられ、子どもの言語や社会性を評価する発達質問紙の1項目としても取り扱われている(小椋・綿巻, 2004)。しかし、乳幼児期における「おどる」という行動の発達の変化に関して十分な研究が行われていないのが現状である。また、乳幼児期における「おどる」という行動の個人差とその後の言語や社会性の能力との関係性についての知見も数少ない。

子どもたちは、いつごろからどのような「おどる」という行動を産出するのか?そして、その行動の個人差がその後のコミュニケーション能力とどのような関係性にあるのか?これらの問題を明らかにするため、本調査では、縦断的研究手法を用いて、乳幼児期の「おどる」という行動の発達の変遷を調査した。また、乳幼児期の初期にみられる「おどる」という行動の個人差とその後の言語や社会性などのコミュニケーション能力の発達の関係性を検討した。

2. 方法

本研究は 2015 年から 2019 年の期間に実施した。本研究には 79 名の乳児(内、男児 45 名)とその保護者が参加し、乳児が生後 9 ヶ月、12 ヶ月、15 ヶ月、及び 18 ヶ月の時点で調査を実施した。

本調査は、保護者に対する質問紙調査と乳児に対する発達検査から構成されていた。保護者に対する質問紙調査では、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」(小椋・綿巻, 2004)を使用し、乳児の「おどる」という行動の有無を評価した。また、乳児に対する発達調査では新版 K 式発達検査を実施し、姿勢・運動、認知・適応、及び、言語・社会の三つの領域について評価した。

3. 結果と考察

図 1 に、「子どもはおどりますか」の質問項目に対する保護者の回答を示した。生後 9 ヶ月から 18 ヶ月にかけて、「子どもはおどる」と回答した割合は増加した。

そして、各月齢における χ^2 検定の結果、9 ヶ月、15 ヶ月、そして 18 ヶ月において有意差が認められた(9 ヶ月: $\chi^2 = 25.86$, $df = 1$, $p < .05$ 、15 ヶ月: $\chi^2 = 13.89$, $df = 1$, $p < .05$ 、18 ヶ月: $\chi^2 = 16.49$, $df = 1$, $p < .05$)。一方で、12 ヶ月では有意差はみられなかった。これらの結果は、生

後 12 ヶ月時点で、半数の乳児が「おどる」という行動を産出することを示している。

また、本研究では、乳幼児期の初期にみられる「おどる」という行動の個人差がその後の言語や社会性などのコミュニケーション能力の発達に関係しているか検討した。12 ヶ月時点の「おどる」行動の有無、及び性別を独立変数として、18 ヶ月時点の各領域(姿勢・運動、認知・適応、及び、言語・社会)の得点ごとに重回帰分析を行った。重回帰分析の結果、12 ヶ月時点の「おどる」行動の有無から 18 ヶ月時点の認知・適応の得点、及び言語・社会の得点に対する標準偏回帰係数(β)が有意であった。図 2 に、12 ヶ月時点の「おどる」行動の有無と 18 ヶ月時点の各領域の得点の関係性を示した。これらの結果は、乳幼児期の初期にみられる「おどる」という行動がその後の発達と関連している可能性を示唆するものである。

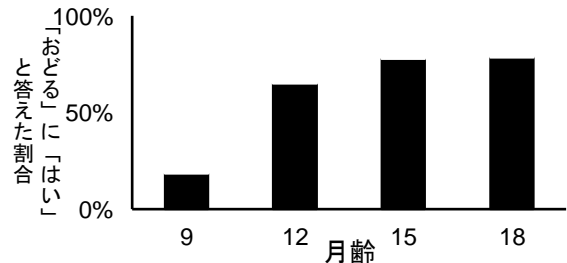


図 1) 子どもがおどると答えた保護者の割合

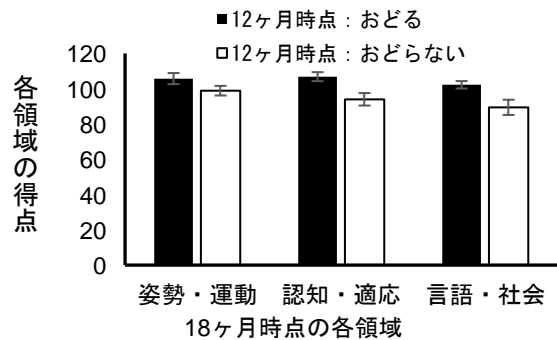


図 2) 12 ヶ月時点の「おどる」行動と 18 ヶ月時点の各領域の得点の関係性

今後、12 ヶ月時点の「おどる」という行動の動作解析を進めて、乳幼児期の「おどる」という行動の動作特徴とそれらの社会性の発達における役割の解明へと展開していきたいと考えている。

4. 引用文献

- 1) 生澤雅夫・松下裕・中瀬淳(編著)(2002) 新版 K 式発達検査 2001. 京都国際社会福祉センター。
- 2) 小椋たみ子・綿巻徹(2004). 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」. 京都国際社会福祉センター。